



奥多摩

《第65号》

令和4年(2022)4月15日

(一社)奥多摩観光協会



日原のシンボル 稲村岩



倉沢のヒノキ

東京の秘境 日原

JR奥多摩駅から約10km、緑豊かな日原街道を遡るといきなり眺望が開け、忽然と姿を現す集落が日原です。日原はなによりも関東随一の規模を誇る日原鍾乳洞でその名を知られています。日本鍾乳洞9選にも選定されており、奥多摩町を代表する観光スポットのひとつで、年間10万人以上の観光客が訪れ賑わいます。年間を通じて洞内の気温は約10℃と涼しく、夏の観光地としてはこれ以上の場所はないスポットといえるでしょう。高度成長の時代、日原で産出する石灰の採掘がピークを迎えて栄え、1000人以上もの人が暮らす集落にまで発展しましたが、人口流出が続き、現在では約70人まで減少してしまいました。また都内の最高峰雲取山や鷹ノ巣山登山口としても知られています。溪流釣りファンからも人気が高く、シーズンには観光客や登山客、釣り人らでも大いに賑わいます。

環境省が2000年に行った巨樹調査では、日原地区にて1000本近い数の巨木が報告され、奥多摩町が全国一巨木の多い町として新聞やテレビなどで紹介されました。そのなかでも代表的な巨木が、東京都指定天然記念物の「倉沢のヒノキ」です。推定樹齢1000年、樹高34メートル、幹周り6.3メートルの巨木を地元では「千年ヒノキ」と呼んでおり、関東では最大クラス、全国でも有数なヒノキの巨木としてその名を知られています。奥多摩町のPRスローガンである「巨樹と清流のまち・おくたま」も、この全国有数の巨樹の多さから来ています。その他、日原から雲取山方面へ向かう日原林道沿いにもカツラやトチノキミズナラなどの巨木が数多く存在し、見るものを飽きさせません。日原周辺の森は徳川幕府により御留め山として伐採を禁じられ、長いあいだ保護されてきたために、原生林が多く残り、巨木も数多く残ったのだらうといわれています。バードウォッチングにも最適な地としても知られており、オオルリやクマタカなど希少な野鳥も見ることが可能です。

日原川沿いの渓谷は10月下旬から色づき始め、11月上旬には燃えるように真っ赤に染まる紅葉を見ることができます。日原はまさに秘境ともいえるような場所で、東京都内とは思えない大自然のまっただ中に身を置くことができるのが最大の魅力ともいえるでしょう。

奥多摩町立日原森林館解説員 高橋弘

奥多摩山歩きワンポイントアドバイス ～初夏の山々に五葉躑躅を訪ねて～

2年以上も続いたコロナ禍もそろそろ落ち着きを見せ、私たち人間を野山に連れ出して欲しいものです。春たけなわのこの時期、奥多摩でも一番躑躅が里から山へと大急ぎで登り始め、自然は確実に初夏に向かって進んでいます。

そこで先に成人された敬宮愛子内親王殿下にあやかり、殿下のお印でもあるシロヤシオ(五葉躑躅)に焦点を当ててみたいと思います。

I. 田中澄江とシロヤシオ

福島県東部に位置する大滝根山(1,192m)山頂直下に広がるシロヤシオについて、「ゆけどもゆけども、その純白とその深緑が尽きることなく、自分の前後左右をかこんでいる。…この花の下でこのまま倒れてもいいと思った。」とその著書「花の百名山」で絶賛しています。

一方、その後に編纂された山と溪谷社の花の百名山では、西丹沢にある檜洞丸(1,601m)が紹介されています。ここではつつじ新道から檜洞丸への稜線付近が見どころです。

II. 日本最大級の五葉躑躅群生地

御用邸のある那須町、マウントジーンズスキー場に隣接する登山道周辺のシロヤシオは特に圧巻です。北温泉から三本槍岳に向かう登山道(中の大倉尾根)を中心に、標高差約500mにわたり3万本程が生育しています。中には樹高5m以上の大きな木や樹齢300年を超える老木も点在しています。

標高差があるので毎年5月中旬～6月上旬にかけシロヤシオ群生地は花のトンネルとなり、散策する登山者にも人気です。

III. 名前の由来とシロヤシオの分布

シロヤシオ(白八汐)は五葉躑躅とも呼ばれ、ツツジ科の落葉樹。また、樹皮が松に似ていることからマツハダの別名でも呼ばれています。

花は大きい白色で、花全体としてはやや五角形に見え、大木に一面に咲く様子が美しいと人気です。花は葉の影に咲く傾向があり、白色なので遠くから目立ちにくく、また葉は車輪状に五枚(五葉)であることから五葉躑躅の名前の由来となったものです。全体に華やかさというよりは、清楚で上品さが当てはまるでしょう。このことから皇室に誕生した殿下のお印に選ばれたのでしょうか。

花言葉は「愛の喜び」「上品」など。

分布は岩手県南部から四国の太平洋側にかけ、他

の樹木との密を避けた崖などを好む傾向にあります。針葉樹など大木の陰になると、いつの間にか元気を失い立ち枯れに至るようです。

なお、直射日光の強い場所では、葉の一部にまわりが褐色に縁取りされるのも特徴の一つです。また、晩秋には他のツツジよりも紅葉が楽しめます。



左は数百の白花を背景に咲く花
・上は褐色に縁取られた特徴的な葉の様子。

IV. 奥多摩近辺における見どころと時期

「日の出山」(902.0m)花期…4月下旬頃

頂上直下の北面で百年以上の古木が一株。崖に咲いているので、丁度目の高さで写真撮影できます。

「御岳山奥の院」(1,077m)花期…5月上旬頃

奥の院の東側頂上直下の登山道と頂上から鍋割山方面に向かう西側登山道付近で、頭上に見上げる形での鑑賞となります。

「御前山」(1,405.0m)花期…5月中旬頃

御前山と惣岳山の鞍部からカラマツ広場に抜ける登山道で、御前山の北北西稜線に個体数は少ないが見かけられます。

「大岳山」(1,266.4m)花期…5月中旬頃

山頂南面直下に数本が自生していますが、背が高いので写真に収めるのには苦労があります。

「天目山(ミツドッケ)」(1,576.0m)

避難小屋からの天目山南面の巻道と頂上付近の登山道沿いで、多くの個体数が見られます。また、頂上付近から北西方向への登山道脇には、まだ花を付けていない幼木が多数あり、葉の縁取りが足元で観察出来ます。

VI. シロヤシオの鑑賞(奥多摩観光協会主催)

今年も5月16日にはヨコスズ尾根から天目山への登山が予定されています。ここでのお目当てはほかならぬシロヤシオ(五葉躑躅)です。

4月16日が受付初日ですので、忘れず申し込みをしましょう。

春、登山シーズンたけなわです。巣ごもり後は徐行運転から始め、夏山への目標を定めて日頃のトレーニングを重ねたいものです。体力気力の回復には澄んだ空気が一番です。新年度も元気に踏み出しましょう。

ガイド 富士 光男

～ 行って来たあよ ～

NO. 32 高水三山+(馬^{まほとけやま}仏山) 山行メモ

穏やかな山日和、会員32名+ガイド5名で軍畑駅を8時25分出発。平溝川に沿って30分程進んだころ高源寺着。ここからロウバイが香る急坂を喘ぎながら進み、「9時05分登山口着」。着衣調整・休憩を済ませ再出発。まもなく大きな砂防ダムが現れ息を切らしながら一気に階段を登る。そこから緩い平溝川支流沿いの坂道を進む。三合・四合目の石柱を横目に登り、ススキの茂る急登を登りつめると展望の開けた尾根に到達、六合目の石柱を確認。皆一様に五合目が無かったことに気づく。尾根道を進みテーブルのある休憩場所に到着。ここからは眺望が開け都心のビルやスカイツリーを確認。休憩後、杉や檜林の植林地の緩やかな階段状の道を七合・八合・九合と進む。杉などの大木が現れ間もなく常福院山門前の階段下に到着。階段の両側にはミヤマシキミが植えられていて所々赤い実をつけている。10時18分山門をくぐり立派な造りの本堂を見た後、裏手にあるトイレ場所を確認。集合場所の高水山頂へ向かう尾根にある東屋の広場を伝える。ここでは眺望の開けた場所から薄らと房総半島・東京湾・江の島・相模湾が確認でき、皆それぞれ満足の様子。私自身も何度も来ていましたが初めて見ることができ感激。「高水山頂 10時35分着」。「山頂の木々の間から男体山・筑波山が見えますよ!」と指さす。会員の中から「あの白い塔は何?」との声。「あれは鳥居観音(河又の先にある)」と伝え出発。山頂からの岩場の下りに「注意して!」と声を掛け、しばらく進むと落葉樹の心地よい平坦の道に到達。しばらく進むと岩茸石山下へ。岩と木の根の急登を登りつめると三山唯一最高に眺望の開けた山、「岩茸石山頂 11時15分着」。30分間の昼食を済ませた後、確認できる山座の説明。



南から木々の間に見える大山・丹沢山系・日の出山・

大岳山・大菩薩嶺・本仁田山・雲取山・川苔山・日向沢ノ峰・棒ノ折山・武甲山・武川岳・横瀬二子山・伊豆ヶ岳・根ノ権現・顔振峠・日光白根山・男体山・筑波山・スカイツリー等を説明。眺望の良いことを再確認。その後、下山を開始。山頂直下のやや危険な岩場を「足元に気を付けて下りてください!」と声を掛け、間隔を取りながらゆっくり下る。そして緩やかな道を進み「関東ふれあいの道」の石盤を過ぎたところで近年伐採し森が消えた皆伐地に到達。眼下に広がる大展望・素晴らしい景色に歓声の声。登山道から下一帯が、また、惣岳山頂までが伐採された最高に眺望の良い箇所が下の画像。

右奥：惣岳山



眺望を楽しみつつ惣岳山頂下の岩場まで進み。岩と木の根を這いつくばりながらの急登や、足元から切れ落ちている箇所を慎重に登る。「惣岳山頂(青渭神社奥の院) 12時35分着」。山頂からは沢井に向かう尾根を下り道標の分岐を経由、惣岳山下の巻道で岩場下まで戻る。来た道を馬仏山下までさらに戻って尾根を登ってすぐ「馬仏山山頂 13時15分着」。特に眺望はなく手作りの標識のみ目に入る。山名の由来はこの山の下、歩いてきた登山道脇にある享保の時代に設置された馬頭観音か? 地元の方に聞きましたが分ならず。

山頂から大丹波集落を木々の間から見ながらピークを3つ越え、その都度、急勾配の下りとなり皆さん悪戦苦闘。ようやく送電線鉄塔下まで下り、駅が近づいていることでひと安心。駅までの最後の急勾配を下ると「川井駅 14時50分到着」。皆様方のご協力により全員無事に、15時20分発に乗車、帰路へ。ガイド一同大変うれしく感謝しております。

ガイド 斉藤 全一

奥多摩樹木雑話

「見はらしの丘」を歩く

木々のすがたから、時の流れを感じてみたくなり、奥多摩湖畔の「見はらしの丘」を訪ねました。うっそうとした木々の陰りのない明るい丘陵の径は、60年前頃のダム工事で崩された丘を整えてつくられたものです。日当たりの良い斜面では、20年前頃から植栽されてきた各種のサクラやカエデが若い樹形をつくり、それらに混じって



ウメノキゴケ

他から入り込んだのかも知れないイヌツゲ、ツガ、アカマツの伸び盛りの株が、緑色の点景をつくっていました。おどろいたことに、これらの若木の幹には、ほとんど例外なく緑白色のウメノキゴケなどの地衣*がびっしりとまとわりついていました。湖面からの湿った

風が時間をかけて作り出したものでしょう。

八方岩展望台へ向かう途中、エドヒガンザクラの大木に出会いました。おそらく60年前頃の伐採をまぬがれたものでしょう。長年の雨風を耐え忍んできたのか、つややかな桜肌の幹は粗々しい肌に変っていました。長く伸びた枝をたわわに垂らした樹形からは、ソメイヨシノを生んだ母親（父親はオオシマザクラ）のしなやかな母性を感じました。

八方岩展望台の乾そうした突出部には、アセビ、イヌガヤが適地とばかりに群落をつくっていました。帰りがけ、もう一度先ほどのエドヒガンザクラに立ち寄り、垂れ下がった枝にぴったりとへばりついた褐色の冬芽をしばし見つめました。冬芽の小さなからだの中で、これまで冬芽のはたらきを抑えてきたホルモン（アブシジン酸）が、冬の寒さにあって少しずつ消えていくのに合わせてうごめき始めた小さなからだの胎動が伝わってくる思いがしました。

*地衣：上層にソウ類（ランソウ類）、下層に菌類が合体している植物。ソウ類は養分生産、菌類は水分補給といった共生生活をしています。

絵も 橋上 一彦（元観光ガイド）

奥多摩の野鳥

～ クマタカ ～

留鳥 全長 80 cm 翼の長さ 165 cm
（トビより大きい）

今回は、食物連鎖の頂点に立つタカ類のクマタカをご案内します。頭から後首は、灰褐色に黒色の縦縞で後頭に短い冠羽があるのが特徴です。留鳥なので、九州以北の低山帯から亜高山帯の針葉広葉林に棲んでおり、ただ数が少なく目にするチャンスはまれです。しかし遭遇したときの感動はひとしおです。市街地で見るとはありませんが、



クマタカ

絵 大澤新次

奥多摩のような森林、湖川が多い場所ではチャンスがあります。私もドラム缶橋をわたり、山のふるさと村への林道で奥多摩湖の上空を悠然と飛んでいるのを目撃したことがあります。また、山のふるさと村の入口付近でも目にすることがあります。カッコイイー！と思わず声が出ました。クマタカは、普通は木の枝などに止まり長い間じっとしていることが多いですが、獲物を見つけると羽根をすぼめて一直線に降下し、がっしりと足で捕獲します。ネズミ、ヒミズ、鳥などの小動物が獲物です。以前、山のふるさと村への林道でクマタカを見た時に、湖の反対側の林で偶然カモシカに会いました。人間を恐れることなくじっとこちらを見つめ15分程じっとしていました。これもラッキーでした。奥多摩はなんとすばらしい所なのか。

ガイド 畑 幸夫

とっておきの山里歩きガイド

集落の名前は、「丹三郎」

今回は、吉野街道を丹三郎経由で梅沢集落まで歩きます。JR古里駅から多摩川に架る万世橋を渡ると丹三郎です。御岳山へ通じる大塚山登山口まではよく知られたルートですが、その先、梅沢集落方面へ向かいます。吉野街道からそれて生活道に入ると「丹三郎木洩れ陽の里・水車入口」の標識が目にとまります。セウピー度満点の雰囲気の中で鮮烈な水しぶきとともに回る水車は、シャッターチャンスです。



水車の隣には、祠があり、大日如来、地蔵、馬頭観音などが安置されています。大日如来の石像は、奥多摩に限らず、あまり目にするのではなく、由緒、姿かたちも立派なもの。大日如来特有の組手、不浄とされる左手を下に忍術を唱えるような手の組み形がユニークで一目見て大日如来と分かります。

その先、奥多摩大橋を左手に見て梅沢集落への生活道に入ると普段は、ほとんど人の姿を見ません。

歴史ある梅沢集落

江戸時代の地誌『新編武蔵風土記稿』や『武蔵名勝図会』、それに当地方に残る『りゅうじゅうじむら 龍壽寺村』には、「龍壽寺村」と記されていますが、里人は、「梅沢村」と呼んでいるとあります。ちなみに、川の名前は、梅沢川で、現存する宝珠庵の山号は、梅沢山です。以前に龍壽寺という名



前の寺があり、村名にしていたようです。先の地誌によると、公には、龍壽寺村の名前で届出、私的には、梅沢村を使っていたという。知恵者がいて納税逃れとか、お上をたぶらかしたのかミステリーを感じます。

宝珠庵の裏山には、幹回り6mほどのイヌグスの大樹があります。太さだけでなく、張り出した板状の根（板根）にも注目です。あわせて、何故こんなところに常緑広葉の巨樹があるのか、興味が湧いてきます。

梅沢川に架る江戸川橋

こんなところに江戸川橋？ テレビのお名前番組に登場しそうな名前です。実は、明治時代の地誌『皇国地誌・梅沢村』を読むと、梅沢川の又の名を「井戸川」とありました。橋を造るとき誰かが「い」と「え」を聞き違えたのでしょうか。江戸川区とは縁もゆかりもない奥多摩町に江戸川橋があります。ついでに言えば、地下鉄駅の江戸川橋は、江戸川区ではなく文京区にあります。

江戸川橋を渡り、熊野神社に向います。奥多摩



町内には、稲荷神社の数ほどの熊野神社があり、古くからの熊野信仰、熊野詣でが想像されます。

当時の様子は、前期の地誌に譲るとして、写真にあるユニークな鳥居に注目してください。新調したばかりですが、昔からの



様式を踏襲しています。権現鳥居とか両部鳥居と呼ばれ、神仏混淆の名残りです。

(ガイド 岡崎 学)

「奥多摩町観光案内所」の紹介

今回は奥多摩町観光産業の最前線、観光案内所について紹介致します。観光案内所の業務としては、観光に関する調査研究、観光資源の保全、開発及び利用の促進、イベントの企画立案等、様々な業務があります。その中で一番は奥多摩に来られたお客様が最初に行く場所としての、奥多摩の顔です。奥多摩観光の入り口として、最初を感じる奥多摩の印象ではないでしょうか。事務局長の川久保氏（写真前列左）ほか8名が交代勤務しています。

昨年から白丸ダム隣接の「エコっと白丸」の管理運営業務もスタッフが日替わりで担当しています。昨年7月から案内所のレイアウトを変更しました。川久保事務局長によると、事務作業エリアの充実、スタッフエリアスペースの拡充による作業性の向上、また、新型コロナウイルス感染防止の点から混雑した場合には外で待ってもらい密を避けることも考えてのことだそうです。

観光案内所のスタッフ



ナラ枯れ 永山公園



カシノナガキクイムシ

来さっせえ奥多摩のバックナンバーがカラーでご覧いただけます。



春から夏 奥多摩山歩き イベント案内

令和4年4月から7月

令和4年度友の会イベントカレンダーが出来上がりました。（詳しくは観光案内所にお尋ねください）

- No. 6 5月16日(月) 天目山(ミツドック)
- No. 7 5月19日(木) ~20日(金) 雲取山
- No. 8 5月27日(金) 笠取山
- No. 9 6月9日(木) 山里歩き「大氷川」
- No. 10 6月10日(金) 大檜峠から鍋割山
- No. 11 6月12日(日) 丹波天平 日曜登山
- No. 12 6月24日(金) 川井駅からの山里歩き
- No. 13 7月15日(金) 山里歩き「大沢・小菅」
- No. 14 7月20日(水) 古里駅からの山里歩き

「ナラ枯れ」って知っていますか？

先日、青梅市の永山公園を歩いてみました。すると、大きな雑木を業者の方が伐採していました。「ナラ枯れの木を切っている。あまり多くあるので、歩道の近くだけ切っているのだ」と言っていました。

ナラ枯れとは、ナラ菌という病原菌による伝染病です。このナラ菌を木から木へ運ぶのがカシノナガキクイムシと呼ばれる甲虫です。

カシノナガキクイムシはナラ菌を、木に開けた穴に植え付け畑とし、穴に生えたナラ菌を食べて成長増殖します。ナラ菌が増えるとその木は水分を根から葉に送ることができなくなり、夏には葉が枯れます。

被害の特徴は木の幹に直径2mmほどの穴があり根元に大量の木くず（フラス）がたまっています。

奥多摩にも多くのコナラやミズナラの大木があります。すでに感染しているかもしれません。

参考資料 森林総合研究所

ガイド 小峰 一郎



次号発行予定：令和4年7月15日

発行 一般社団法人 奥多摩観光協会
 住所 〒198-0212 奥多摩町氷川210
 電話 0428-83-2152 FAX 0428-83-2789
 編集 名人・達人観光ガイドの会